

「膵疾患アトラス 症例に学ぶ診断・治療の考え方」

東京女子医科大学教授・消化器外科 羽生富士夫 編集

東北大学名誉教授・仙塩総合病院院長

佐 藤 寿 雄

「医療、医学は患者と共に始まり、患者と共にあり、患者と共に終わる」(ウィリアム・オスラー)。ある有名教授が言った。「教科書に書いてあるのはウソである」と。教科書は最大公約数的な、普遍的な事実を記載しているのであって、決して間違ったことを書いているのではない。系統的な知識体系を学びとるには必要なものである。しかし、患者の示す病像は多彩であり、系統的な成書のみを参考にしては日常の臨床で思わぬ不覚を取ることがある。もともと刺激に対する生体の反応は一樣ではない。教科書の記載とは様相を異にする症例に遭遇することもまれではない。臨床の難しさは患者が多様な反応を示すことにある。そのような実例を示してくれるものは臨床の実際に有力な指針となるものである。

このような目的に沿ったものとして、このたび、東京女子医科大学羽生富士夫教授は「膵疾患アトラス—症例に学ぶ診断・治療の考え方」を上梓された。同教授は「外科の神

様」中山恒明教授の高弟であり、執筆された方々は羽生教授御一門の俊秀、学究の士である。同教授は消化器外科一筋に歩んでこられた方で、既に第33回日本消化器外科学会総会を主宰されている。one of the most aggressive surgeons のほまれ高い、意欲あふれる、精悍のものの典型的な外科医である。

本書は教科書的な記述を目的としてはいない。同教授らが経験された症例のうち、画像をはじめとして資料のそろった比較的最近の症例とのことであるが、貴重な55例の膵疾患症例を取り上げ、既往歴、検査所見、臨床経過、手術所見、術後経過に至るまでが要約されている。鮮明な画像、明快な手術所見そして摘出標本、更に組織所見と美しいアトラスが豊富に収録されている。そして1例ごとに「アセスメント」として著者らの懇切丁寧なコメントが示されている。これは著者らの見解を知るうえで極めて興味あるものである。更に疾患ごとに「総括」として、自験例を基に明快なる解説が加

えられ、本書を格調の高いものとしている。

内容を要約すると、急性膵炎(3例)から始まり、多彩な病像を呈した慢性膵炎(6例、同、関連疾患6例)、嚢胞性疾患(6例、同、関連疾患2例)、膵癌(7例)、更に特殊な膵腫瘍(6例、同、関連疾患3例)が取り上げられ、解説されている。膵内分泌腫瘍としては3例(同、関連疾患2例)が、膵奇形(3例、同、関連疾患6例)、最後に膵損傷(2例)が提示されている。消化器病センター各部門のご協力を仰いだとのことであるが、これだけの貴重な症例をまとめられ解説されたのは、さすが羽生教授と、改めて敬意を捧げたいと思う。羽生教授が序文の中で述懐しておられるように、同教授らの膵臓外科の歴史は患者を教科書として過ごした苦闘の20年であったことを示すものであろう。

「手術は経験である」—中山恒明教授の語録の1つである。1例1例の積み重ねのうえに確実に安全な手術がある。実際に経験した症例を基にした記述は説得力のあるものであり、記憶の中にしっかりと定着するものである。極めて実戦的な座右の書として、若い研修医はもちろんのこと、外科医のみならず、日常の臨床に携わる実地医家の皆様方にも広くお薦めしたいものである。

A4変型判 174頁 1990年 定価
20,600円(税込) 送料300円

医学書院 刊